

* 日本精神文化の根底にあるもの (七)

「始原への回帰」—— 本田親徳翁が遺した霊学（鎮魂法・帰神術）について

*** 渡辺 勝義

キーワード…

始原への回帰・神霊・霊学・鎮魂・帰神（神懸り）・国学・復古神道・神祇官・E・トレルチ・M・ウェーバー・正統と異端・神主義と人主義・神道の本質・近代教育の本質・カント学・実存・量子力学・霊肉分離・「真の私」・疎外・個人実体論・幸魂奇魂・遊離魂

一、はじめに——明治期の宗教政策

本論はこれまで記紀などの古典を基として日本及び日本文化、神道の本質について数回に亘って書き及んできた「日本精神文化の根底にあるもの」シリーズのまとめとして、現代日本人がいつしか失ってしまった尊貴ともいべき神道にとつて最も大切な神霊との邂逅——「始原への回帰」の道について、幕末・明治に生きた神道学者・本田親徳が遺した霊学（鎮魂法・帰神術）を概観しながら考察してみたい。それは同時に、日本にとつて明治維新とは、また近代とは一体どういう選択であったのかについて顧みることにしよう。

はじめに、この項では明治元年となる慶応四年から昭和十八年四月までに発せられた法令について佐伯氏がまとめた記述があるので、それを見ながら神道国教化とキリスト教防衛を主眼とした明治期の宗教政策が果してどのようなものであったのかについて一瞥しておきたい（注1）。

（一）慶応四年（明治元年）一月一七日 王政復古の号令が発せられる（神祇事務総督とその係りが置かれたが、それらは復古神道派いわゆる平田学派一門で占められた）。

（二）二月三日 中央政府職制を改正（三職七科を三職八局に改め、神祇事務局以下七局二督、正権判事等が置かれ、神祇事務局において神祇祭祀部神戸の事を掌る。太政官の上に神祇官が置かれ、その中心は復古神道派が占めた）（太政官日誌）。

（三）三月一三日 神祇官を興し、祭政一致制度なる。

（四）三月一七日 別当及び社僧の復飾令を発す（それまで神職の上位にあつて寺務を司つてきた別当僧や社僧を廃した）（神祇事務局達一六五号）。

（五）三月二八日 神仏判然令を発す（神仏号を区別し、社から仏語・仏像・仏具類を除去させる）（太政官達一九六号）。

（六）四月四日 別当及び社僧の還俗令発令（宮中日記）。切支丹宗門及び邪宗門禁止令発布（太政官達二七九号）。

（七）四月二四日 菩薩号廃止の令（太政官通達）。

（八）七月一七日 江戸を改め東京と称する（『太政官日誌』）。

（九）明治元年九月八日 明治元年と改号布告（太政官布告）。

（十）一〇月一八日 神仏号混淆の廃止令出る（太政官通達）。

こうして見てみると、明治初年の宗教行政は復古神道派つまり平田国学が主導していたことが分る。黒船の来航以来愈々国学の復興が起こり、その国学神道思想は尊皇攘夷運動の原動力となり、天皇親政、皇（王）政復古を目指して遂に明治維新を開くに至った。その主な人々を一部挙げれば、本居宣長の門人である伴信友、

* Received January 28, 2008

** 長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部 地域づくり学科、Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1057 Eida, Isahaya, Nagasaki 854-0081, Japan

その門人の樹下茂国、また宣長没後の門人の平田篤胤、平田鏞胤、篤胤の学問を受け継ぐ津和野藩士の大國隆正や玉松操、矢野玄道、垂加神道の竹内式部、水戸学派の藤田幽谷、その門下の会沢正志斎などであった。大國隆正の献言により明治元年正月には上古の制に習って神祇官が復興した。ところが明治四年八月には早くも神祇官は神祇省に改められ、太政官の下に置かれることになる。そして後には結局廃止されるに至るのだが、こうなった理由としては幾つか挙げられるであろうが、政府の官僚たちと神道学者たちとの間の葛藤や、神道界内部の軋轢、また大國隆正や玉松操などが官を辞して後、この方面の人材不足……といったこともあるが、また、神道の宗教、非宗教性（神社神道は国家祭祀であるとする）、つまり神道をどう捉えるかという大きな問題もあった。

明治二年九月に宣教使職制を發布し、長官の多くは神祇官が兼務したが、適切な人材を得ることが出来ずに廃止することになる。そこで新たに僧侶を加えて教導職となして宣教に当たさせたが、遂にその成果を挙げる事は出来なかった。明治四年八月には神祇官は神祇省に改められ、翌五年には神祇省を廃して教部省にあらためられ、同省奉斎の天神地祇八神両座は宮中賢所に移され、神祇官・神祇省で執行した祭事祭典は宮中式部寮の所管となった。それ以来、教部省はただ単に社寺の行政事務や教義に関する事務を取り扱うのみとなった。この後、神道派と仏教派の対立、神官僧侶間の不和、資金不足、また政教分離と信教の自由を建前にした島地黙雷らの批判等により教部省は明治一〇年には遂に廃止されることになる。（注2）

明治六年にヨーロッパ諸国の思想や文化に驚き、カルチャーショックを受けたばかりでなく、スツカリ欧米のそれらに魅了されてしまい、日本魂をどこかに置き忘れてしまった岩倉大使たち一行は欧米視察から帰国するや、それまでの教育つまり明治元年より皇学所や漢学所を設けるなどして太政官令（達）をもって大学校や各学校において神典国典を重視してこれを教育の第一義に挙げていた従来の国民教育の一切を全く切り替えて、西欧文化制度や思想を模倣することにし、以来、東京帝国大学を本山とする西欧ヒューマニズム文化教育を全国に徹底させることにしたのである。勿論、彼等は西欧近代的概念としての宗教（Religionの翻訳語）や西欧的な政教分離制度も学んで帰って来た。ヨーロッパではカント的な古典科学的

文明観が否定されてロマン主義が台頭していた時であるが、日本にはこの文明科学主義とロマン主義との二つが同時に入ってきた。富国強兵策を取る明治政府としては文明開化主義を選択したという次第である。

さて、明治一五年一月には神官教導職の兼務が廃止され、神社と教義とは画然と分離されるに到り、次いで明治一七年一〇月には教導職を全く廃止することになり、神道の宣布は神社から姿を消すこととなった。かくして明治初年から始まった神道を中心とした明治政府の国教政策と伝道宣布はここに終焉したのである。こうして、神社はただ御祭神を奉斎する所となり、また、神官は単なる祭祀を掌る神職となつてしまったのであり、以後、神社界はこの状況を今日までも引き摺っている。

明治天皇はこのままでは欧米化の風潮が日本人の国体の上に重大な危機をもたらすことを深く憂慮され、国体国本を明らかにする必要を慮られて明治一五年に有栖川熾仁親王を総裁として皇典講究所を設立せられ、また東京帝国大学に古典科を開設せられた。更に明治二三年には國學院を設立され、また伊勢神宮皇学館をも設立せられて「国体を講明して立国の基礎を鞏くする」ことに意を注がれた。だが、まことに残念なことに神道界は遅々として振るわず、斯界に人を得ることが出来なかったのである。（注3）

二、正統と異端

明治政府は概念化された信念体系を持つ宗教、例えばキリスト教や仏教などの教義宗教はReligionの翻訳語としての「宗教」の範疇に入れ、そして明確な教義を持たない神道や皇道などは「道」や「学」いわゆる道徳論であるとして非宗教性を打ち出した。即ち、神道は国民教化のための「治教」なのであって宗教に非ずとし、神社神道を西洋的な「宗教」の枠外に置き、その自立を図ったのである。また後には幕末・明治まで活躍・展開して来た復古神道とも性格を異にした近代神道（国家祭祀）へと展開して行くことになる。そしてその後、日本的な政教分離が進行していく。政府は文明開化主義を推し進め、反文明的なもの、たとえば「病い直し」や加持祈祷の類は文明ならざるもの、淫祠邪教として抑圧し排除していった。

例えば、明治七年六月七日の教部省通達第二二二号には、次のような禁止令が出されている。

「梓巫市子憑祈禱狐下ヶ禁止ノ件」

從來梓巫、市子、並憑祈禱、狐下ヶ杯卜相唱玉占、口寄等ノ所業ヲ以テ人民ヲ眩惑セシメ候儀自今一切禁止候条於各地方官此旨相心得管内取締方嚴重可相立候事

「禁厭祈禱ヲ以テ医薬ヲ妨クル者取締ノ件」

別紙乙第三十三号ノ通神道諸宗管長へ相達条向後禁厭祈禱ヲ以テ医薬等差止メ政治ノ妨害ト相成候様ノ所業致候者之候ハハ於地方官取締可致此旨相達候事

金光教や天理教、黒住教、大本教などへの度重なる規制や弾圧が行われた事は誰もが周知のことであるが、それらの宗教団体は文明化即ち宗教化することでしか淫祠邪教の目から逃れる事は出来なかった。民間宗教や山伏、修験道の者たちも巫行為や交霊、禁厭祈禱などの禁止によって、その活動は著しく制限された。

さて、愈々本題に入るとしよう。ここで大切なことは、「一、はじめに」ですで見えて来たように、明治期の神道すなわち本居宣長や平田篤胤たちの国学神道というものはすでに本来の神道、すなわち神道の本質を見失ってしまったという点である。神道界の論客、葦津珍彦氏は神道のエッセンスともいうべき神懸りの法、つまり神霊と直接交流する術（すべ）を知らず、従ってなんら神霊との感合も無く「神意」を全く受け得ない、こうした国学神道者たちについて「世俗合理主義者に近づいてしまつていたから」として、次のように厳しく批判している。

なぜかれらは、「天地の動きは神の知るところであるから神に聴くべきだ。正しき道は、神々の命に忠であるべきだから、神の意は、神から聴くべきだ」と答へなかつたのであらうか。かれらが憧れた古神道時代の日本人は、それらのすべてを神から聴いて、それを信じて行動し確信を持った。かれらは、事ある時に臨んでは、神の意をきいて、決断し行動したので、格別に浅はかな人知で拵へ上げた一般抽象的体系的な教理も、教義も、無用だつたのではないか。それは、かれらが聖典視した古事記や書紀のいたるところに明記されてゐることではな

いか。「その事に応じ、その時に臨み、神々から聴くのがもっとも正しい」と云へば、もっと迫力ある回答になりえたであらうし、神道人らしかつたのではないかと思ふ。だがかれらは、然うは答へなかつた。かれらが断固として然う答へなかつたのは、神懸りを古代人のこととしては肯定したらしくも見えるが、「自分等の今の時代には正しい神懸りなどはない」との世俗合理主義者に近づいてしまつてゐたからではないか。古典によれば、古代人は禊祓によって、身を淨め、鎮魂につとめ、神々に接して、神意をきくのにつとめたものではなかつたか。それこそが古神道の根幹なのではなかつたか。（注4）（傍線、引用者）

正統化とは正統が人主義のグループの体制を占めることをいう。宣長たち国学者の仕事の最大の弱点は神霊を抜きにした、少なくとも神信仰を媒体とした研究ではなかつたという点であろう。復古神道を唱えた賀茂真淵や本居宣長、平田篤胤などの国学者たちは当初、仏教や儒教を廃して純粹神道をめざし、もつて神道界の刷新に本気で取り組んだのであり、その姿勢には多くの賛同があつて日本中が敬意を払つたのである。ところがその時、権力側が彼等に擦り寄つてくるに伴つて、正統派というものが形成されるようになり、純粹に神道に生きようとする者たちを排除するようになる。つまり、国学者たちは神道の純粹を求めながらも結果的に神道が本来持つていた神霊との交流といった神道の最も本質的なものまでも喪失してしまつたのである。

それは丁度、M・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（注5）に見る如くである。プロテスタントたちが貨幣を嫌い、純粹に信仰に生きようとして清貧という信仰生活を嚴格に守つたが、その結果として莫大な富の蓄積がなされ、その瞬間に神信仰が金信仰に變つてしまつた。その最も悪しき姿をアメリカに見る事が出来る。人はここまで墮落出来るものなのか：という見本でもあらう。

また、国学正統派の有識者が神懸りを無視したことについて葦津珍彦氏は、

江戸末期から明治へかけて、庶民の間に、ふかい影響力を及ぼした神懸り宗教人の輩出した社会現象は、大いに注目されるべきではあるま

いか。いはゆる国学正統派の学識者は、宣長らしい神懸りなどは無視してをり、自ら神懸りすることに、つとめなかつたのみでなく、神懸りの霊力ある人物を求めようとしなかつた。たまさかに大衆に影響力ある神懸り宗教人の話を聞いても、その言動や行法の一端をとらへて「それは古神道ではなく、道教仏教を混じた迷信に過ぎない」とて全的に否定した。しかしそれらの神懸りは、異端の行法を混じてゐたとしても、なほ古神道の重んじた神懸りの伝統を残してをる。神懸りを全的に無視した官僚や国学者よりも、かれらこそ、古神道により近いものがあるのではないか。（注6）

と述べ、更に神懸りによる神の啓示が受けられない近世の神道はすでに亡んでゐるとして、

神懸りの神の啓示によつて、一大事を決するのが古神道だつた。だが奈良平安のころから段々とそれが乏しくなり、近世にはそれがなくなつたとすれば、古神道の本質は、すでに十世紀も前に亡び去つてしまつてゐるのではないか。神の意思のままに信じ、その信によつて大事を決するのが神道ではないか。それなのに、神懸りなどはないものと決めて、神前では、人知のみによつて思想しつゞけ、たゞ人間の側から神々に対して一方通行で折つてゐるとすれば、それは、たゞ独りよがりの合理的人間主義で、本来の神道ではあるまい。かへしりとは、その時代転換の苦悶だらう。（注7）（傍線、引用者。以下、同じ）と手厳しく批判している。

何故に尊皇攘夷運動はもつと別の道があつた筈なのに結果的には西欧の模倣に傾いて、文明開化主義へと走つてしまつたのだろうか。明治維新は初めはすばらしいスタートだつたのに、一体どうして歪んでしまつたのか。「御維新」といわれる如く、実は「明治維新」の中心は神道復興運動であり、日本の本質へ戻ろうとした動きであつた。つまり、「日本の本質」への回帰であつたのに、これが急速に拡がり始めると、その本質を担つていた筈の者たちが結果的にどうして「異端」として排除されるに到つたのであろうか。例えば西南戦争で城山に散つた西郷隆盛や、平田篤胤の神道論（神典解釈や幽冥論、宇宙論など）を『難古事記』中で激しく駁撃した本田親徳などはその典型といえるであらう。明治国家が出来上がった時に、

それを共有しない者たちが国家の主導権を掴み取り、国のために命を賭けて戦つた者たちが結局は冷や飯を食わされる事になつてしまつたのである。これまでのさまざまな明治論、近代国家論というものは、すべてこの最も中心にある、即ち、原動力となつてゐる部分を何も語つておらず、重要な部分がまったく欠落してゐると思われる。

さて、参考までにここで初期カトリシズムの成立過程を考えてみよう。初期の教会が正当化（体制化）していく中で、異端を排除していく。E・トレルチはその排除されていく異端の側にキリスト教の本質を見てゐる（E・トレルチ『古代キリスト教の社会教説』高野・帆苅共同訳、教文館、一九九九年二月、参照）。つまり、M・ウェーバーからトレルチが受け継いだプロテスタンティズムの倫理の本質は異端史の中に結実してゐると思つてゐるのである。堀米庸三氏によれば、カトリック教会の本質は、

その客観的制度としての性格にあり、客観的に存在する歴史上の教会が、その聖職者の位階的秩序ともども神の人類救済の恩寵の施設である。

ということの意味するといふ。（注8）そして、秘蹟論などキリスト教的正統論争の争点については、堀米氏は次のように述べてゐる。キリストによる使徒ペテロへの依託（マタイ伝一六章一八、九節）である天国の鍵の伝承により、「この鍵の保持者である第一使徒ペテロを初代の司教とし、代々の法王によりその權威を受け継ぐローマ教会はみづから超自然的摂理のこのうえない明証をもつもの」であるのに対して、

異端の教会は自覚した成員の自由意志による共同体であることを特徴とし、それは成員をはなれて客観的な価値をもたない。恩寵はこの共同体の中に実現され、また確保されるが、それは成員の自覚的努力を前提とし、またその成員に属するものであつて、共同体そのものに属するのではない。そしてまさにこの恩寵への参与という問題において、異端とカトリックのあいだには決定的な差が生ずるのである。正統と異端との決定的争点もこの点にかかつてゐる。（注9）

といふのである。

人主義の教会に対して、異端視された神主義の集団があり、古代には常に異端として立ち顕われ、それは中世の修道会に繋がつて行く。常にこの

修道会は異端として排除されながら、一部が教会に取り込まれることで、教会発展の原動力となり、更に異端を強く排除するようになっていく。いわゆる魔女狩りの原型がここに顕われている。プロテスタントは近世という社会枠組みの中で、一般職業人を祭司とした修道会運動（これはあくまでもプリーストによる改革運動である）の末裔であったとも言える。この視線は明らかにM・ウェバーの直伝である。歴史家のキリスト教解釈と真つ向から対立するものである。これは基本的に教会の歴史が正当な歴史であって、先に見てきたようにキリスト教の本質は教会の中にあるという立場に立っている。古く修道会が教会を占領し、また、教会が修道会を取り込む：といったことが繰り返して行われて、地上の人間主義が展開して行き、神のもとに生きようとした人々を排除した歴史が教会史なのである。現在の教会の規則は実は古い修道会の規則を踏襲しているということを忘れてはならない。こうした初期カトリシズムの成立過程に見られるのと同様のことは、あらゆる宗教に共通して起こってきた。人主義（人間中心主義）は人間を限りなく傲慢にし、いつの間にか宗教の本質を見失ってしまった。

例えば日本の中世・近世仏教界に目を移すと、寺院仏教を嫌い、隠遁生活を理想として釈迦牟尼尊の如く生きようとした人たち、厳しい掟に生きる檀林や禅林（仏教僧徒による西欧修道会的組織―学問修行道場）の人たちがおり、この人たちが大衆に敬われるようになって行く。そのため、日蓮宗（身延山）や本願寺、そして禅宗本山などではこれに対して非常な危機意識を持つに至り、そして急激に檀林にグングン擦り寄り、法主をそこから迎える：といった事態までが発生する。ルールも、法主の出身した修業僧組織の規則をそのまま援用することになる。そのような形で本山規則に取り込まれた檀林は、共通して世俗権力と結びついて信仰生活そのものを停止するようになり、国家権力の力を借りて異端の弾圧に奔走するようになる。例えば、日蓮系の教団の場合、身延山を中心とした正統派の日蓮宗教団が江戸幕府に公認されたのであるが、その僧侶達の墮落が甚だしいということになり、江戸初期に成立した清廉な僧団として誉れの高かった飯高の檀林から法主を迎え、その規則を日蓮宗の全体の規則として刷新を図った。それは幕府の嘉するところとなり、教勢の拡大に繋がったが、

結果は全体として幕府の命に唯々諾々として従う信仰なき教団に全体が陥ると共に、信仰に生きようとした、例えば不受布施派を幕府を通して弾圧する事になったのである。もし日蓮がその姿を見たら、彼は不受布施派に正当性を与えたことであろう。

拙著『鎮魂祭の研究』『古代の鎮魂祭』中に、

一端律令国家が完成し、国が安定してくると、今度はかえって危険かつ不要な存在として中央からは遠ざけられる運命となり、そこに儒教倫理によるオルギー的要素の排除の跡を見るのである（注10）

と記しているが、政治であれ、宗教であれ、学問であれ、スポーツであれ何であれ、人主義になった瞬間に、その本来の「質」がまったく変ってしまったのは注意すべきことである。文明開化（鹿鳴館時代）がまさにそれであった。繰り返しになるが、人主義は人間を限りなく傲慢にするのである。

三、神主義か人主義か―近代教育の本質について

この項では、人主義についてカント哲学を中心に少し振り返って見ることにしよう。

カントの『純粹理性批判』（注11）は近代科学という世界観が哲学的に保証された瞬間であった。

カントこそは科学を絶対化した者である。彼は一生をかけて一体何を目指していたのか？

それを知ろうとして、いわゆるカント史を文献学的に如何に細かく調べ尽した所で何も分かりはしないことは、老婆心ながら忠告しておこう。決して忘れてはならないのは、近代から現代まで圧倒的な力を持っていたのはカント学であったことだ。

然るに、もしもカントに、ソクラテスやエデンボルグ（注12）のような霊的能力があつたなら、彼の説は全く違うものになっていただろう。

彼は人間が科学的理性を共有して科学的世界を実現したら、世界は即平和になり繁栄するという絶対的信念があつたから、その証拠を論理的理性を以って証明しようとした。カントの持っている絶望的限界というのはまさにこの点に掛かっている。カントをめぐる問題点とは、カントの大前提

である『科学の絶対性』という神話そのものが全体として虚構であるという根本問題が発生したということを見据えることにある。（これは我々が教壇に立つて「学問」というものを伝える時に最も細心の注意を払うべき根本問題である）。

近代の学校教育に基づく学問というもの（現代の学問をも含めて）が、あらゆるものを認識する際にカント的な意味での科学を無意識の前提としている。然るにその危険性というものを気付かせることが、これからの教育の根幹になくなくてはならない。

ということとは、カント的な科学理性主義の少なくとも大枠に関して、教育者たるものはシッカリした知識と、其れに対する見識を持つておかねばならない。そうすることによって、如何に危うい世界の上にすべての学問が成り立っているかということを示すことが出来るからである。

カントの哲学の排撃対象は二方向に向かつていた。一つは当時の迷信の根源である呪術師や錬金術師の有する論理であり、それは俗流プラトン派の弁証法に基づいていた。カントはこの錬金術師たちのすべてを詐欺、愚人のわざとして徹底的に叩くために、アリストテレス以来の論理学（形式論理学）を擁護し、応用しながら改変しようとした。目的は科学的理性の根底に論理学を設定しようとしたことにある。

彼が攻撃対象とした第二点は、形式論理学の正統的継承者を自認し、また教会に所属し、オースドクシーの保有する神学における形式論理学にこそ最も激しく向けられていた。純粹理性批判の本論（第三章）の眼目は、この教会における形式論理学を徹底的に批判し、科学的理性にのみ妥当する新論理学に書き換えることにあった。

彼の《先見的悟性論》は理性の最も正しい使い方として『悟性』、つまり弁証法も教会論理学も排した科学的理性、即ち近代の理性の根底となっている論理構造を提示する事にあつた。

彼はまず、理性を感性を超えるものとしていた。この場合、彼が理性と呼んでいるものは人間のみの有する「言葉を使う能力」を指している。感性は決して感覚を指す語ではない。人間の持っている感性の無限に開かれている存在のあり方について、彼は第二章において極めて示唆性の高い提言をしているが、所詮、感性を感性たらしめているのは、普遍へと開かれ

た無限への感受性であり、それを支えているのは理性による論理形式であると主張する。つまり、どこまでも感性は理性の派生物に過ぎないと決め付けている。従つて、感性論はあくまでも理性論の前置きにすぎず、理性論こそがカントの理論の中心となる。

しかるにカントは、理性そのものは信じるに足るものではないと主張する。それは所詮、言葉を使う能力以上のものではない。多くの言葉の使用つまり理性のあり方は言葉の誤用の歴史であつて、その最も悲惨で詐欺的な典型として、教会の理性使用のあり方が糾弾される。特にカントが注目したのは、如何にもプロの哲学者らしく、その言葉の内容ではなく（内容に関わるのは科学者の仕事である）、形式的な側面つまり論理構造にあり、古い教会的形式論理学に徹底的な修正を加えた。その手続きが三章の内容である。純粹理性批判を理解することは、この三章を理解することであり、それが如何に現在の教育体系に重大な爪跡を残しているかを知ることにある。

それを踏まえて、後半では錬金術師たちにおける弁証法の徹底的な論難が展開することになる。純粹理性批判後の彼のすべての著作は、厳格にこの枠を守つて構築されている。

このカントの考え方は人主義の極限であると共に、世界中の近代学校教育の絶対的基礎となつているということを、絶対に忘れてはならない。例えばいじめの問題でも、近代主義的いわゆる教育評論家のごときは、結局は理性的に話し合つたら良いという方向に結論してしまふ。これは人主義的解釈のなにもでもない。そんなこと位で解決される事ではなく、かえつて事態を更に悪くすると思えない。

しかし、このカントの人主義というものに対して「おかしい」と疑問の声をあげる人が出てきているのも事実である。キエルケゴールの投げかけた疑問が非常に多くの人々の心を捉えるのは、彼のメッセージがカント的世界の全否定にあるからである。彼は人間の理性よりも、聖書における神の啓示の方を信じた。死者として葬られたラザロに向かつて死体置き場から出てくるように呼びかける、このイエスの言葉をそのまま信じる事が人間として唯一正しい営為であるというキエルケゴールの立場は、カントとは絶対に相容れない。

人同士が話し合うということの無意味さ、神の實在のみが真実であるということ、それは極限の非合理（不合理ではない！）にしか存在しないという、最も大切なメッセージをキエルケゴールは我々に伝えているのである。その意味で、カントからすればキエルケゴールの先駆的存在たるスエデンボルグもまた、ただの錬金術師のひとりにすぎなかったのである。

これからの教育においては、カントがもつともらしく語っていることの虚偽を明らかにする事が大切である。

まず第一には理性主義——哲学の柱になっている科学的理性の絶対主義である。科学的理性を人々が共有したら、世界の人々は幸せになり、世界は必ず平和になるということの嘘。

第二に民主主義——理性的な話し合いが人々の心を和ませ、世界が平和になるということの嘘。

まず（一）の科学的理性の果たす人間世界への役割について。

何よりもこのような教育の結果は、神霊への畏れを失った人々を大量に発生させる。

その結果、自分の衝動がパンドラの箱を開けたように無限に肥大し始める。その結果、果てしもない精神の渇きという地獄の中に人々の心が追いつまされて、その渇きを埋めるために必死で、手当たり次第にその無限に拡がった心の中に衝動を満たすだろうと思われる対象を取り込もうとするようになる。絶望だけが箱の底に張り付いて残ってしまう。生きていくために避けがたい最小限のものに満足するという、生き物として大切なあり方が壊れてしまう。無意味な闘争と、飽くなき快楽の追求が発生して、かつて存在しなかったような破壊と殺戮とが結果することは歴史の示す通りである。理性主義を標榜する国ほど、ひどい殺戮を繰り返してきた。その惨状は理性主義に犯されつつあるアフリカの現状を見ればよく分かるではないか。少なくとも理性主義はアフリカに惨禍しかもたらしていない。我々はこのことを決して忘れてはならない。

次に（二）の理性的に話し合ったら何とかなる、話し合いが争いをなくすという嘘について。この問題を個人のレベルで考えてみると、学校でひどくいじめられたり、家で荒れたりする子供が居るとする。それに対して、例えば、父親がこの子と話し合わなかったことが原因で、もっとシッカリ

話し合っていればこういうことは起こらなかったという評論家がいる。真実は果たしてそうだろうか。

人は何かの関係のゆがみで攻撃を受ける、あるいは攻撃してしまう……ということがあり得る。問題はそのときに、それをものともせず耐える力、あるいは他者を攻撃したいという自分の衝動を抑制する強い意志力を備えた子供を育てることが最良の策である。本質的に喧嘩や争いを起こさず、また、巻き込まれない人間関係を築くには、これしか解決策はない。それは父親が、また母親が子供と話し合うことによって果たして出来るものだろうか？ カウンセラーが悩みを聞いたなら、そういう強い子になるのだろうか？

例えば、これはあるスポーツ選手本人のプロとしての能力もさることながら、観客を喜ばす卓抜した能力を発揮したS氏の例である。彼は生まれながら成人するまで、父親の姿を見ることは殆んどなかった。何しろ、恐るべき働き者のその父親は、朝四時に職場に出かけて人付き合いを大切にしており、しかも同僚や弟子たちを育てるために夜遅くまでとことん付き合っていた。息子が母親に「自分は親無し子ではないか？」と聞く有様であった。

しかし、その子供は殆んど口も利いていない親とほとんど同じ性格を持つて大人になった。いじめられた時に、彼は決して屈しなかった。しかし、仲間を大切にし、人をいじめするような事は決してなかった。これは父親の生き様が彼を育てたのであって、話し合っただけのものではない。母親も、このような父親を尊敬して、必死で支える姿を示したのであって、決して話し合ったからではない。真実を大切に生きてきた姿、また、一度受けた恩は決して忘れないとする親の生き様が、現在の彼の生き様に反映しているのである。話し合っただけ、よく理解させて出来上がったという事では決していないのだ。

以上、これまで述べたカントのこの二本の柱こそが、世界の教育を歪めている本質である。

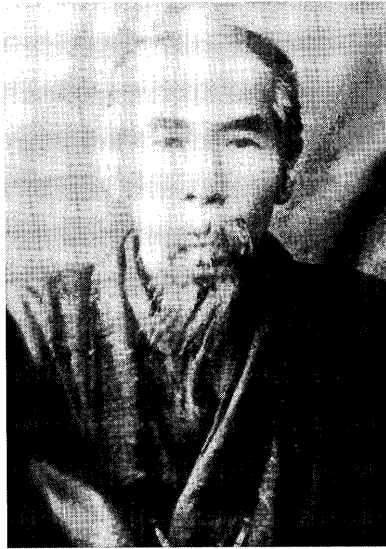
四、靈学中興の祖「本田親徳」翁の略歴

神懸りが權威を失った近世の神道はもはや形骸化した神道であり、それは神道ではなくてただの人間道である——と厳しく批難したのは葦津珍彦氏であつた。

古神道にとつて、この神懸りの神秘は、必須の大切なものだったはずである。その神懸りが權威を失った近世の神道は、古神道の生命を失つて形骸を存するのみとも云ひ得るのではあるまいか。それは神道ではなくしてたゞの人間道なのではあるまいか。少なくとも、その本質が著しく變つてゐることは否定しがたい。（注13）

ところが、葦津氏が重視した神懸りの神法を立派に体得した神道学者が居たのである。

幕末・明治の優れた神道学者であり、また靈学中興の祖とも称される本田九郎（親徳）は、土族本田主蔵（典医）の長男として文政五年（一八二二）一月十三日、川辺郡加世田郷武田村（現、鹿児島県加世田市）に生まれた。幼少より資性鋭敏にして六・七歳の頃より藩校において漢学を学び、また剣道をよくしたという。青年期には風雲の志を抱き、剣を持つて立たんとして武者修行のために藩を出て京にのぼつた。のちに天保十年（一八三九年）頃、水戸に遊学し、当時令名天下に名高き水戸学の会沢正志斎の門に入り、そこで約三年余り熱心に學問に没頭し、皇学・漢学など漢の学を修め、当時最先端の科学・哲学をも学び、将来の学的基礎を成したという。本田親徳翁は古典を深く学び進める内に、この宇宙の森羅万象のことごとくは靈的作用によるに違ひなしとの考えに到り、古典を正しく理解するには自らが實際に神靈に直接して神教に依拠するより他に無しとの確信を得たものと思われる。（注14）



本田親徳翁

記紀などの古典を紐解けば、古代は祭政一致そのままに、例えば『古事記』中巻の崇神天皇条を見ると、

此の天皇の御世に疫病多に起りて人民死にて盡きむと為き。爾に天皇愁ひ嘆きたまひて、神床に坐しし夜、大物主大神、御夢に顯れて曰りたまひしく、「是は我が御心ぞ。故、意富多泥古を以ちて、我が御前を祭らしめたまはば、神の氣起らず、国安らかに平らぎなむ。」とのりたまひき（注15）。

とあるように、国内に疫病が流行して国民の大半が死に絶えようとした時に、天皇が身を清めてうけひ寝（神との誓約）をし、荒ぶるその理由を神に問うたところ、それは大物主大神の御心であることが判明した。故に大物主大神の子（靈統）である意富多泥古命を探し出して神主として斎き祭らせたところ、「役の氣悉に息みて国家安らかに平らぎき」とあるように疫病は終息して国内はもとの秩序を立派に取り戻したと記している。今、記紀古典からこうした神懸りの記述例を幾つか列挙すれば、次の通りである。

- (イ) 天宇受賣命次繫天香山之天之日影而、為咲天之真柄而、手草結天香山之小竹葉而、於天之石屋戸伏汗氣、踏登杼呂許志、為神懸而、掛出胸乳、裳緒忍垂於番登也。爾高天原動而、八百萬神共咲（注16）。
- (ロ) 「是時、神明憑倭迹々日百襲姫命曰、…」とあつて、大物主神が倭迹々日百襲姫命に神懸りした事例（『日本書紀』卷第五、崇神天皇七年条）（注17）
- (ハ) 「時天照大神誨倭姫命曰、…」とあり、天照大神が倭姫命に神懸りして、託宣した事例（『日本書紀』卷第六、垂仁天皇二五年三月条）（注18）
- (ニ) 「是時、倭大神、著穗積臣遠祖大水口宿禰、而誨之曰、…」とあつて、倭大神が大水口宿禰に神懸りして託宣した事例（『日本書紀』卷第六、垂仁天皇二五年三月条）（注19）
- (ホ) 「時有神、託皇后而誨曰、…」・「時神亦託皇后曰、…」とあり、神功皇后に神懸りが合つた事例（『日本書紀』卷第八、仲哀天皇八年秋九月の条）（注20）
- (ヘ) 「於是、從軍神表筒男。中筒男・底筒男、三神誨皇后曰、…」（『日

本書紀』卷第九、神功皇后摂政前紀九年三月(二月条) (注21)

(ト) 「於是、天照大神誨之曰、……」・「亦稚日女尊誨之曰、……」・「亦事代主尊誨之曰、……」・「亦表筒男。中筒男・底筒男、三神誨之曰、……」

『日本書紀』神功摂政元年二月条) (注22)

(チ) 「便天神誨之曰、……」(『日本書紀』神功皇后摂政四七年四月条) (注23)

(リ) 『時居嶋伊弉諾神、託祝曰、……』(『日本書紀』卷第二、履中天皇五年秋九月条) (注24)

(ヌ) 「於是、月神著人謂之曰、……」・「日神著人、謂阿閉臣事代曰、……」

『日本書紀』卷第一五、顯宗天皇三年の春二月及び夏四月条) (注25)

こうして記紀の記述を見ていくと、古代には神と人との非常に密接な関係があつた事が判明する。わが国に於いては古代より一朝事ある時には神の方から、あるいは人間の方から求めての帰神(神懸り)の神法によつて直接に神霊の「神意」を伺い、神誥(神教)を受け賜わり、その神霊の御心を心として政治に事なきを期していたのだが、どうしたものか中古以来これが途絶えてしまったのである。帰神の神法が途絶えてしまったその理由については、本田親徳の高弟の一人であり駿河の聖人とまで言われた月見里神社の長澤雄楠翁が次のように述べているので参考までに記しておく。

古今の歴史に徴するに日本書紀に載する所、上世の神懸りは方法の精密なりしと其の式の厳正なりしと憑依の神霊の高かりし事と、其の神誥の確実なりしは殊なりしなり。降りて儒教の渡来、仏教の東漸以来、思想に一大変遷を来し、爾来皇祖の遺制たる神祇を祭祀するの道は日に増し月に加わりて衰退し、遂に幽冥に感合するの術を失いたるは、宮廷にて神懸りを行い賜いたるの事蹟の史に見えざるを以て知らる(注26)

つまり、仏教や儒教などの外来宗教の渡来によつて、日本人の思想に一大変化をもたらし、それ以来、神祇の道が衰退していったのだといふのである。

古には神霊と直接して神意を伺うための神意窺知の法があつて、これに

よつて国難の折には直に神意が那邊に在するかを知り得たという事実、本田翁は深く感じ入るところがあつたに相違ない。

天保十年の頃といへば、英米仏露等諸外国の船がわが国と通商条約を結ぼうとして頻りに来航してきた時期であり、やれ勤皇(王)だ佐幕だ、倒幕だ尊皇攘夷だ……などと諸藩の意見が入り乱れて一致せず、国論は分裂し世論が大きく揺れ動くまさに世情騒然としていたときである。今見て来た如く、崇神天皇紀や仲哀天皇・神功皇后紀における神懸り事例のように真に神意の存するところを知ることが可能であるならば、如何なる国難に際しても何の恐れることがあろうか。真に神意を伺う事が出来さえすれば、開国か鎖国かの眼前の大問題もたちどころに解決しよう。ところが神霊の御神意を伺うという、この尊貴な神懸りの神法が中古以来スッカリ廃絶してしまつており、国学者たちは理屈理論に明け暮れして、神霊に直接して「神意を問う」ことなど出来る者は一人もいなかったのである。国難とも言うべきこの大事に際して、ならん神の御心を知ること出来ず、その術もないという昨今の情けない有様を、本田翁はどれほど憂慮し嘆かれたことであろうか。

また、本田翁は晩年の平田篤胤(天保十四年没)の「気吹舎」にも出入りし、彼の学説を傍聴したともいわれる。もしそれが事実であるならば、仙童寅吉を通しての篤胤翁の幽冥研究に関する講義も聞き知っていたに相違なく、いよいよ深遠玄妙の境地に思いを馳せることもあつたであろうことは想像するに難くない。後に本田翁は『難古事記』『古事記神理解』で篤胤の説の悉くを手厳しく駁撃することになるのであるが、それも篤胤の思想・学問を良く聞き知っていたからこそ出来得たことなのである。

その後、会沢先生のもとを辞して京都藩邸に居た折(天保十四年)に、京都伏見に狐憑きの少女(一説には七歳の少年)が歌をよく詠むという噂を耳にして、自ら訪ねて憑霊実験を試み、霊が幼児に憑依して人語を語る有様を实地に見聞した。その時の様子は以下のようであった。本田氏が狐憑きの少女(少年)に「お前は何か憑いて居て巧い歌を詠むそうだが、どんな歌でも直ぐに詠む事が出来るか」と訊くと、その幼児の面差しは見る見るうちに変わり「どんな歌でも読む」と答え、墨を磨りながら「題を与え給え」と言う。時恰も十月の冷たい雨が降っており、庭には哀れにも紅

葉が雨に打ち落とされていたので、「この庭の景色を詠んでみよ」と言う
と、直ちに筆を取って「庭もせに散るさえ惜しきもみじ葉を朽ちも果てよ
とふる時雨かな」と詠んですぐに外に遊びに出て行ってしまったというの
である。このことが契機となったものか本田翁は心中深く悟るところがあつ
て、爾後世俗の一切の名利を打ち捨てて神道修行に打ち込むことになる。
翁は深山幽谷を跋涉し、或いは諸社靈窟に参籠するなどして、中古以来途
絶したままでの「神霊と感合する道」を求めてまさに命懸けの修行に明け暮
れたのである。

本田親徳翁の著書『難古事記』巻六によれば、

此の神懸のこと本居平田を始め名だたる先生達も明らめ得られざりし
故に、古事記伝、古史伝ともにその説々皆誤れり。親徳拾八歳皇史を
拝読し、此の神法の今時に廃絶したるを慨嘆し、岩窟に求め草庵に尋
ね、終に参拾五歳にして神懸三十六法あることを覚悟り、夫れより幽
冥に正し現事に徴し、古事記日本紀の真奥を知り、古先達の説々悉く
皆謬解たるを知り弁へたりき（注27）。

とあるように、難行苦行が功を奏してついに安政三年（一八五六）頃には
神懸りに三十六法あることを知り、慶応三年（一八六七）頃には帰神（神
懸り）の神法を確立している。神伝によつて幽冥に正神界と邪神界の別あ
ること、また各々一百八十一階級あること、憑依した霊にその種類・上中
下の品位（等級・働き）のある事、それらを判別する「審神者の法」、邪
霊を縛るところの「靈縛法」等を明らかにし、古典に基づいて見事にわが
国古代以来の神懸りの神法を体得・確立されたのである。この本田親徳翁
が確立した霊学を後世「本田霊学」と呼んでいる。

明治の御世になり、翁は一時鹿児島島の郷里に帰つたらしく、明治三年に
三島通庸の著になる石峯神社再興創建の記事中に、不明であつた御祭神の
御名が本田親徳翁の帰神によつて明らかになったと記されている。明治五
年、備中沼名前神社の宮司に任ぜられたが、上司と激論して幾許もなく辞
したと伝えられている。明治六年頃上京し、西郷隆盛の紹介で副島種臣と
も親交があつて、正式に師弟の縁を結んだ。副島邸にて帰神を修したこと
もあり、後に『真道問対』（問者副島種臣、対者本田親徳）が成っている。
明治十六年十二月、元鹿児島藩士奈良原繁氏が静岡県知事になった折に同

藩の誼もあつて本田親徳翁を招聘し、二カ年あまり学筵を開き、多くの有
志を指導した。明治二十一年、自己の御霊は岡部の神社に鎮まることを
言い置き、翌二十二年四月九日、川越の木村辰右衛門宅にて逝去した。享
年六十七歳であつた。

主な著書には『道之大原』（一卷）、『真道問対』（一卷）、『靈魂百首』
（一卷）、『産土百首』（上・下巻）、『産土神徳講義』（上・下巻）、『難古事
記』（十巻）、『古事記神理解』（三巻）などである。また、副島種臣伯爵
の他に本田親徳翁と師弟の縁を結んだ者として、「駿河の聖人」とまで称
された月見里神社宮司の長沢雄楯が居るが、その長沢氏は本田翁について
次のように述べている。

霊学というのは神典と国史とを根拠とし、専ら神懸の法則に随つて修
業し、神霊の実在を徴証してその尊厳を体得し、我国神典の世界無比
なる所以を諒解し、茲にはじめて宇宙成立の原理、地球の組織、顕幽
の分界、天孫降臨の所以を解釈し皇祖天神の御威徳を感銘し、我が皇
室の尊嚴なる所以と神社存在の理由を解釈し得べきものであるのだ。

然しながらこの霊学は神典学と両々相俟つもので神典を精研し神霊の
存在を体験して始めて御威徳を知るべきものであつて、古来の学者の
如く古訓の解釈のみで神典の主旨の玄妙なる所以原理を了解し得るも
のではないのぢや。神懸の法に因る神霊の実在の体験を得て始めて我
が神界の幽遠微妙なる原理を了解し、古来先哲の難解として居たもの
も解釈し得られるのだ。――この霊学は維新前、薩摩の藩士本多親徳通
称九郎によつて儒佛渡来以降廃絶していた神懸の法則が再建された事
によつて興つたもので、全国を遊歴する事四十年、困苦惨憺に克く
之を大成されたので今の世に神懸の法あるは翁の力である。（中略）
明治の世、神典学者で千古不拔の卓越の説あるは、この翁一人のみぢや
が惜い哉世に少しも知られていない（注28）。

また、本田翁が確立した鎮魂法と帰神術の神法を称して長澤翁は、
親しく其行方を見るに神霊を人に憑依せしむること自在のみならず、
亦克く無形神懸の自感に熟したると審神者として疑わしき憑霊を訊問
するの精密にして厳肅なる毫も遺漏なく、邪霊を責罰するに靈縛する
の速なる等、他人の追及する能わざる者なりし。此靈妙な神懸の効用

は神靈嚴存を實証し、古今哲学の疑問を解決し、神典歴史の解釈の誤謬を訂正せし等、其學術を裨補し世道人心に關係ある少なからざりしも、神懸は秘して容易く人に教えざる。博聞宏記にして玄妙の理に通ずるにあらざれば其の蘊奥を窺う能わざるとの故を以て、之を知る者稀なり(注29)。と述べている(注30)。本田翁の靈術が如何に卓絶したものであったかが窺えよう。



長澤雄楠翁 (月見里神社)

さて、本田親徳翁がその弟子に神術(鎮魂法・帰神術) 允可の印として授けた「神傳秘書」があり、その冒頭には、
神界ニ感合スルノ道至尊至貴濫ニ語ルベキ者ニアラズ：(注31)
とあり、更に続けて、

吾朝古典往々其實蹟ヲ載スト雖モ中世祭祀ノ道衰ヘ其術ヲ失フ既ニ久シ神傳ニヨリ古ニ復ス是レ即チ玄理ノ究極皇祖ノ以テ皇孫ニ傳ヘシ治國ノ大本ニシテ祭祀ノ蘊奥ナリ

蓋幽齋ノ法タル至嚴至重深ク戒慎シ其人ニアラザレバ行フベカラザル者アリ濫ニ傳フベカラザルノ意茲ニ存ス然リト雖モ其精神萬難ニ撓マズ自ラ彊メテ止マザレバ竟ニ能ク其妙境ニ達スルヲ得ン後ノ此傳ヲ受クル者厥レ之ヲ諒セヨ幽冥ニ通スルノ道唯專修ニアリ：(注32)

また、本田翁が体得した靈学の覺りの境地については次のように記している。

幽齋ハ宇宙ノ主宰ニ感合シ親シク八百萬ノ神ニ接ス其修シ得ルニ至テハ至大無外至小無内 無遠近 無大小 無廣狹 無明闇 過去ト現在ト未來トヲ問ハズ一モ通ゼザルハナシ 是レ即チ惟神ノ妙法：(以下、略す)(注33)

本田翁の神伝秘書中のこの条は、此処に確かに居ながらにして、どんな過去にも、どんな未来にも、宇宙の果てまでも同時に存在し得るということであり、存在の本質に触れるものである。広さとか、時間とか、流れとかは仮象であつて、存在の本質に立ったときにはそのすべてが自らの内に存在する。喩えて言えば、光自体には宇宙の広がりはない。しかし、光は宇宙を飛んでいるという仮象世界の中で、人は生きているのである。

五、本田靈学「鎮魂法」・「帰神術」についてー存在の本質への道筋

〈鎮魂法〉―この項では本田親徳翁の靈学の大本とされる鎮魂法^{みたましづめのり}を中心に考察してみたい。さて、「自己の確立」が大切である：などと言われるが、この「自己」というものを人はどのように認識して居るのであるか。西洋近代は誤った「私」認識をしており、「本当の自分」というものが自己の身体の中に閉ざされて存在して居るものと錯覚しており、「私人」で閉じてしまっていると思ひ込んでゐる。だが、「本当の私」というものは、外に向つて開かれて存在しているのであり、決して個人の身体内に閉ざされて自己完結しているものではないということに気付くべきである。この真の自己、「本当の私」について、これから五く六項と続けて考察して行きたい。

「鎮魂」法に関する本田翁の説は、次の通りである。

鎮魂の法は靈学の大本なれば其の原由を論定し、其の方法を講明せざるべからず。故に今皇典に拠て其の由来を述ぶ。伊邪那岐命曰く、天照大神は高天原を知食すべしと詔給ひて、御首玉の玉をモユラにとりゆらかして天照大神に賜ひき。故に此の玉を齋奉りて御倉棚神と云ふ。これ其の靈魂を附着して現天の主宰たらしめんことを神定め賜ひしものなり。而して此玉を天照大神より、皇孫迹々芸命へ御授けあり、其の時の事実古事記に見えて、おきし玉、おきし鏡、劍とあり。三種の神宝を帝位知食す御印として下し賜ひしより以来、御代御代の帝王は申すも更なり。其の御心を心として、万民悉く尊奉崇敬しておこたざりし、故に神の神たる所以の理由よりして万般の利益靈現を蒙りしこと、国史に照々として、日月と共に光を争うと云うとも我が

誣言にあらざるを知るべし。而して（中略）此の鎮魂法は天授の神法にして現世神界の学則なれば、上は天皇の治国平天下の御事より、下は人民修身齋家の基本、続きて無形の神界探知する事の基礎なれば、朝夕之を懷中にし、事業の閑暇に謹みてこれを省み之を行ない、靈魂の運動活動を学習すべし。（中略）令義解に曰く『鎮魂は謂る、鎮は安なり。人の陽気を魂という。魂は運なり。云うところは、離遊の運動を招き身体の中府に鎮む。故にこれを鎮魂と曰う。』（注34）

本田翁がほんの僅かな者だけに伝えたこの鎮魂の法は宇宙の大法といふべき尊貴な法であり、翁の鎮魂石を用いての鎮魂法は「法」という以上は神則であるといつてもよく、神界（時間・空間を超えた世界）に入る唯一の方法である。分かり易く例えて言えば、鎮魂は核融合反応を起すようなものであり、鎮魂は恐るべきエネルギーが要るからこれを真に成し遂げるにはそれに耐えられる選ばれた魂の持ち主に限られ、普通の人では到底不可能と言えよう。レーザー光線位までなら誰でも作れるが、核融合となるとそうは行かない。全く次元が異なるものである。「神意を知る」ということは、実は核融合反応を起すことであり、通常の次元を完全に超えているということなのである。この鎮魂行法は天性の素質の上にひたすら淨心に努め、万難に弛まぬ熱意と日々の積み重ねの修行の末に奥の堂に達するもので、決して瞬間に出来るような安易なものではない。専心繰り返しながら行を積み重ねる内に光が束ねられて行つて、ある時（臨界状況）が来た時（機が熟した時）にスウィッチと尊嚴無比の神界に到るもの：と言えよう。実はその時こそ、神界の許可が降りた瞬間であり、天の時を得たのである。時間や空間を超絶した神界に自在に参入し得るこの鎮魂法は、自ら体験体得する以外に言葉ではどうにも伝えようのないものであり、ただその人の修行に存するというべきである。本田翁の鎮魂法を論じながら「核融合反応」などといった表現をついしてしまつたが、ついでに此処で最新の学問がどこまで進んでいるかを垣間見してみよう。

筆者の霊学の師である佐藤卿彦（隆）氏は霊学の研修者たちと静岡に居た時、見知らぬ婦人が「先程はどうも」といつて先生に近付き丁寧挨拶されるので、側近の者が「何処で先生と会われたのか？」と尋ねると、何とキリスト教会であつたという。佐藤師にはこうしたことが良くある方であつた。著者自身も、

師について修行中の或る時、もう一人の自分が背後から自分の両肩をもんでゐる：という奇妙な体験をしたことがあるが、佐藤師によれば「それは分霊ではなくて、あなたの分身である。御眷属神がそのようにしてあなたの疲れをほぐされたのである」とのことであつた。こんな話を人が聞いたら一体どう思うであろうか。

量子力学に関する分野では、次のような興味深いことが分かつて来ている。最新の量子力学の理論によれば、電子は時間的にも空間的にも二つの場所を同時に占めることができるという。世界の成り立ちの追及、つまりもの（物質）の究極を追い求めてきたこの量子力学の世界においては厳しい検証実験の結果、最近になつて、「人の意識がこの世を創造する」とハッキリ言明するに至つた。それまでアインシュタインは「自然界における実存はすべて局所的なものである」と言つていたのに対して、量子力学の父といわれるニールス・ボーアは「この世の物質は観測されて初めて実在するようになり、リアリティー（実在性）そのものが観測者の行為に依存する」、つまり「人の意識が此の世の現実を創造する」とハッキリ主張するに至つたのである。「シュレディンガーの猫」のパラドックスによれば、「観察する」という意識と行為がなければ「この世は存在しない」という結論になる。科学者が研究して観察するという行為そのものが、本当は「自然」を究明しているのではなく、「想念」によつて客観的な存在を作り出しているという訳である。ハンガリー生まれのフォン・ノイマン（『量子力学の数学的基礎』、一九三二年）の説によれば、「人間が自然を認識する（見る）瞬間に波動の収縮が起こり、それが測定によつて限定された値になる」と結論している。ノイマンは超光速現象が立派に存在することを証明したのである。このように量子力学では今、「人間の意識」というも

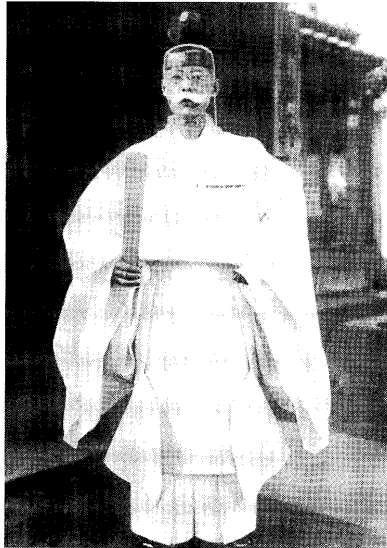


佐藤卿彦（隆）氏と著者
（月見里神社・社務所にて）

のが最大の焦点になっている。波動の収縮とは簡単に言ってしまうと、人が「見る」という行為によって、二つの箱に存在した波が瞬時に一個の粒子にまとまる、つまり波が突然に形を変えて消滅するのであり、これを「波動関数の崩壊」と言っている。アインシュタインによれば、これまで「客観的な実在は、常に局所化されて存在している」と信じていた。ところが、一切何も仲介するものが無いのにAとBとが作用し合う、つまり非局所的に作用し合う、つまり波動の収縮に伴う粒子間における情報交換が超光速で行われている可能性があるというのである。すなわち、宇宙の「個々の諸要素」は基本的に非局所的に広がっており、すべての存在全部が本質的に結び合っているというのである。今、最先端技術が認識しつつあることは、これまでの古典科学では考えられなかった人間の精神力（主観）というものが、エネルギーとして深く潜在しているということである。「この世」の実体は決して私たちの意識とは無関係に形成されているのではなく、人間の精神と自覚そのものが「存在」を創り上げているということになるのだ——という説は興味深い。（注35）

今日、物理学は物の本質を求めてクォークまで辿り着いたのはよいが、そこから先に進めないで立ち止まっている。巨大な加速器で陽子や中性子を衝突させてクォークを出すのはよいが、クォークも一つだけでなくそれが幾つも出てくるに及んで、無限の多義性があるのではないかという大きな疑問が出て来たのである。こうして考えてみると、今や西洋学すべてをやり直す必要が出てきたといえよう。

さて、話を戻して本田霊学鎮魂法が目指す第一段階の霊肉分離の境地というものが一体どのようなものであるかについては、それを実地に修した鎮魂修法者たちの一く二の体験談を以て知る事ができる。まず、長澤雄楯翁



稲葉大英津翁

の高弟であつた稲葉大英津翁は霊肉分離の体験について次のように述べている。

鎮魂修法中、或る時、身体（全身）が徐々に拡がって行き、遂には無限に暢び拡がって、宛ら大虚の中に解け込んだ如くになった。然し精神（靈魂）は判然として鎮魂石の正面に在った。言葉では此れ丈ではあるが、是の時の状態の気分爽快なる事、とても筆舌には述べ難い。此の状態とは実に反対の現象をも体得している。それは、身体が徐々に縮つてくる。其れがグググと云った具合に刻々縮るのだ。そして、次第次第にちぢまって、遂には全く身体が無くなつて了つた。そして、自分の靈魂だけが石の前に正確に留まつていた。この時の精神の爽やかさは、先に述べたと同様である。（注36）

また、その稲葉翁の門弟であつた佐藤隆彦氏の霊肉分離の体験を見ると、次のようである。

身体の周囲を清々しい風が颯々として吹き過ぎ、又吹き来るを覚えた。ハテナ！と思い、周囲を見渡すと（肉眼でなく、心眼でみた）、自分の靈魂のみが大虚に留まつている。然し鎮魂石は眼前に在る。下の方を見ると、遙か下方に自分の身体（肉体）の在るのを判然と認めた。（注37）

さんざん苦心した末に体験した霊肉分離の境地であつた。「自分の身体がはるか下方にあつた」というのは、つまり、「世界を獲得した」ということであり、全生命活動が正しく本来の姿に回帰した証拠であり、塵一つまでそこに戻ろうという願望を持つていのである。現代人は「肉体から精神が抜け出したら亡骸という言葉がある如く、肉体はカラッポになるのではないか」といった陳腐なヨーロッパ流機械論にすっかり毒されており、本質へ



佐藤卿彦（隆）氏

の道筋を示すことが出来なくなっていることに気付かねばならない。

先の記述に続いて、佐藤氏は

一度この境地を会得して以来、鎮魂の場合は勿論、その他の精神統一をとる場合に於ても、何日でも此の状態に楽に入る事が出来得る様になり、霊的活動に一段と飛躍を加えて来たのである。（注38）

と述べ、また、

此の如く、鎮魂は『霊肉分離が出来得ることによって、始めて霊力が活発に運転活用が出来得るものである』（注39）

とも述べている。鎮魂によりこの霊肉分離の境地を体得するまでが実は非常に変なものであるが、しかしこれは先にも述べたが本田霊学修法者にとつては正神界を知るための第一歩なのであり、これが決して最終段階というものではない。本田翁によれば神界は百八十一階級（無限の世界）があるといわれるが、その下から上はまったく雲を掴むようであり、例えば一段上であっても下からはまったく分からない……というのが真実なのである。だから、例えば上空に霊肉分離して霊魂が抜けたとしても、その奥にある光輝く白銀色の光の玉の世界（正神界）に入っていけなければ何にもならない訳であり、例えば真幽界（神界）に入り得てもどこまでも上には上があるのである。「霊学は浄心を本となす」と言われる如く本田霊学は心の清らかさを重視しており、当初から「行」の目的を誤る者、例えば不思議や奇跡、あるいは霊的能力などを得ようとして修行する者の殆どすべてが正神界へではなく、神仙界や佛仙界などといった妖魅界に入っていく……というのが偽らざる実情なのである。

さて、先ほどは気休めに最新の量子力学理論を覗いてみたが、ここで再度「精神（魂）を鎮魂石に鎮める」ということの意味について考えてみよう。

精神と物質といったヨーロッパ的二項対立図式では一般に、物質は精神を疎外すると言われる。特に近代思想の中でカント以来「疎外」ということを言い、精神と身体（質量）をデカルト以来の手法に従い相互排他的な二分法で捉えるようになった。しかるに、ある意味で精神を徹底的に研ぎ澄まして行くとこれが通常の精神だと思っているのとは別に精神があり、その次元では実は物と一つだと言う世界に到達できる。「精神と物質が一

つである」と分かるためには、現在の貧弱な科学力ではこれを機械的に証明しようとすれば、銀河系全体を質量加速機としても間に合わないようなものすごい大機械が必要になる。従って、現時点では「そうではないだろうか」というほんの入り口に立っているだけに過ぎない。鎮魂修法は、実はこの誰にも耐えられない程のことを体験しようとしているのである。現在の科学主義的な世界像の中では、自分の肉体が物質に属しているという世界像の中に、自分の（弛緩した）精神があると思ひ、その世界像に縛られて通常の意識レベルが成立している。そこでは個人の中に精神があつて、その肉体に精神は縛られており、そこから出ることが出来ないと言っている。近代人の思想は、この諦めの上に成り立っているのである。もし、真に自由ということがあるとすれば、この「諦めからの自由」こそが真の自由なのであり、そういう意味では歴史を通じて大多数の人、特に近代人には残念ながら全く「自由」というものが存在していない。しかし、本来、物質と精神は不可分のものである。然しながらまた、それは現象面即ち近代的な意識表象では「肉体から精神を自由に分離する」として表現されるだろう。そういう意味では、精神を肉体から分離する営為が「真の自由人になる」ということを指している。

このような視点から見れば、精神は物質と分離されていて、それ（肉体）に縛られているような存在ではないと言えよう。然しながら、精神と肉体を分離して捉えるこの視点こそが誤謬の根源である。残念ながら、我々の通常の意識はこの妄想に強く縛られているのである。

物質の究極ということを考えてみよう。ここでは、光に象徴される絶対的なエネルギーの根源と言うものに行き当たる。たとえば、光には時間も広がりも重さも存在しない。現象界では光速以上の速度は存在しないからである。それは実は全宇宙と一如のものであり、全宇宙と同じ重さで全宇宙史を内包し、しかもどの有限の時間にも空間にも現象として立ち現れる。実は塵一つですらすべての物質はこの本質を内包している。しかし現象世界という枠組みの中では、すべては有限という枷（枠）の中に封じ込められている。すべての現象界に住む者は、質量は質量、波動は波動という枠の中で存在しているので、例えば生命体というものであれば、生命は生命、身体は身体という枠の中で生きざるを得ない。石は生命なき物、鳥は生命

ある物、生命を失った鳥は石と同じであるという世界である。

しかし、石も実は生命体である。鳥も人間も実は非生命体である。物質が波動であると同時に、じつは質量でもあると言う真実の視点に立った時にはじめて、石は生命即非生命であり、人もまた生命即非生命であるとして、実は光と同じく全宇宙、全歴史そのものの中に立ち現れることが可能になる。この自由な魂の状態こそ、すべての存在、塵一つまでもが回帰を願う真の状態であるにも拘らず、それを得るためには「全宇宙と一体となる」ことの出来る無限の精神力を必要とする。これは選ばれた者にしか到達できない状態であって、通常の精神活動では決して到達できるものではない。

本田親徳翁の鎮魂法・帰神術のめざす所はひとえにこの絶対的な精神的自由を体験するという、ある意味ではとんでもないことを目指している大胆なものである。そこで示されている重要な事は、身体を持っている精神的存在としての人間による霊肉二分の世界観の超克である。

「精神を鎮魂石に鎮める」という表現を通して、実は「人間としての肉体のみに精神が存在する」という世界観が全否定される。人間としての存在自体が精神的存在という確固たる状況を確立すると、その肉体の中にしか精神が存在できないという桎梏から全存在が解放されて、肉体がありながらそのまま精神が自由を獲得する。つまり、今ここに居ながら世界のあらゆる時間、あらゆる空間に自由に存在できるようになる。そこでは、それまで全くの非生命と思われていた物質が、つまり塵一つまでが、実は全宇宙の生命の体現者として立ち現れる。その時、全宇宙が無限の生命活動を行っていることが体現される次元に到達する。その次元では、実は「真空なぞ存在しない」と同時に、全宇宙といっても広がりも長さも、重さも存在しないという本質に到るのであり、それこそ「神の存在そのもの」である。存在と一如になる瞬間を指している。

鎮魂石の存在はその精神を研ぎ澄まし神界に入るための一つの結節点としての手段にすぎない。それは丁度、物質が質量と波動の二面を持った一如の存在であることを知るために、巨大な質量加速器を必要としていることと同じ意味を持っている。

弛緩した精神では、この高次の精神を獲得することは出来ない。鎮魂石

はいわば質量加速器と同じ機能を持つ、精神飛翔への重要な手段である。

もちろん、この力を体得したものは、手段としての加速器が不要となることは言うまでもない。しかし、人類は「物質の本質」に到達しようとして、巨大な加速器を必要としているのと同じように、鎮魂石に關しても「鎮魂石への鎮魂」というこのような手段抜きに生命の本質に到達できると思うのは根本的な誤りである。本田翁や長澤、佐藤隆氏らが体得されたのはそのような「自由」であって、それゆえ、社会の何処にでも、何時の時代にも存在出来た。考えてみれば、それは奇跡や魔法といったまやかしではない。時間・空間を越えて何時の時代、いづこの場所へでも行ける：これが本来の精神のあり方であり、生命というものはこれへの回帰を求めているけれども、そこから厳しく疎外されているのが現象世界なのである。これは極く一部の選ばれた人しか回帰できない厳しい道でもある。大切な事があって、本田翁や佐藤氏らが精神の自由を獲得して、例えば自分の身体をはるか上空（神界）から眺めたと言われた時に、この身体が抜け殻になって死んでいたというのでは決してなく、むしろ、身体も無限の生命力を発揮していたということを、これら師の言葉から読み取る必要がある。「自分の身体が下にあった」というのはつまり「世界を獲得した」ということであり、全生命活動が正しく本来の姿に回帰した証拠でもある。実は塵一つまでそこに戻ろうという願望を持っているのだ。「肉体から精神が抜け出したら、肉体は空っぽになるではないか」といった陳腐なヨーロッパ流機械論に現代人はあまりにも毒されているのである。

帰神ということを考えたときに、霊と肉という単純な二分法で考えては絶対にならない。「霊と肉が同時に無限に充実する」——このことを通してしか、神の世界に回帰できないのだということを本田翁らは語られている。その時、肉体も鎮魂石も無限の光に包まれているのだと考えられる。「修行する」ということの唯一の正しい方向は、この「神への回帰」を目指すことに他ならない。それは存在が存在の真の故郷に回帰する喜びを表わすものである。真の福利というものも、実は此処にしかないのである。

蛇足ではあるが、次のことを付言しておこう。

光は現象世界では秒速三〇万キロメートルという有限の速さで動いていることになっているが、実際には光自体は走ってもいなければ、動いても

いないのである。光は質量が無いのではない。実は宇宙と同じ重さであり、光の視点からは実は長さは無い。当然、存在自体が全宇宙史なのである。従って、「神は光なり」といった比喩表現の奥にある構造については素人では理解出来ない。更に、様々な複数の光が存在していて、世界に生命を増やす働きもしていれば、また、破壊し尽くすという働きもしている。間違った光に触れたら、例えばX線やγ線、放射線などの有害な光に触れたら消滅するしかないことを警告しておこう。神霊を見極める力も極めて大切であり、間違えれば身を滅することになる。

鎮魂修法中は物凄いエネルギー状態に身体が置かれるので、普通の人はこれに耐えられない。身体の内側も充実して宇宙を束ねる。吾れの中に全宇宙がある。全宇宙に向かって開かれるのであるから、すべてを見、聞くのであり、世間で言うような「精神統一したらまったく何にも聞こえない」とか「無感覚になる」などといったことは虚言である。

存在（光）は広がりがない世界であり、存在にとっては時間も空間も無いと同時に全歴史、全空間の広がりでもある。それを鎮魂法によって体感するのであるから、正しい師について修行することが肝要であると言えよう。

今日、神に通ずる自然の道が失われてしまったが、人は「靈止」と言われる以上は神のみすえであり、人間は等しく神の分霊を戴いているのであるから、神に向う心は神理（真理）であると言える。本田霊学鎮魂法は存在（始原・正神界Ⅱ究極的実在の世界）への回帰の唯一の手段であり、時空を超える神法である。自己の魂を鎮めて、その魂が靈性を發揮する、そのものが鎮魂力である。鎮魂は吾が靈魂を統一した力によって奇しき偉大な靈的作用を為すものであるが、すでに述べたようにこれは自らが覚り、体得する以外にない。ちよつとした心の持ち方で世界、すなわち周囲の状況がガラツと変わってしまうので、鎮魂修法者は心の持ち方の変化というか実験というか、常に工夫し、考えて行くことが大切である。霊学は浄心を本と為すと言うが、修行中は恵しき念慮や想いを持つてはならない。想いというものは邪な心が働くと直ちに相応した妖魅界に通じて実現するからである。

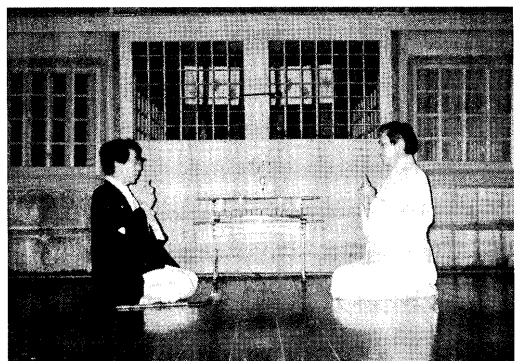
著者の霊学の師である佐藤師は、鎮魂の極意について「鎮魂は覚りにあり、その覚りとは無である」といっておられたが、鎮魂の大切なところは

この「無」の境地の持続と統一の深さにある。鎮魂がいよいよ上達してくると神界との産霊の働きが生まれてきて、神界との一体感というか、雄大な気持ちが生まれ、神界と統合したような状態となる。こうなってくればしめたものである。神術上達の道は日々の弛まぬ努力は勿論のことであるが、どこまでも浄心を基としての熱意と真心、また神に対してどこまでも素直であることとだといえよう。佐藤師はいつも「神道は宗教ではなく、信仰でもない。大自然の原理であり、宇宙の法則である」と言っておられたことを今、懐かしく思い出す。

〈帰神術―神懸り・他感法〉

神懸りの法は帰神術（他感法ともいう）といい、従って「術」とあるからには体験を積んで技（わざ）を練り鍛えて行くしかない。これは靈・力・体の三原則にのつとる術であるから、神主は「体」の状態を良好にしておくことが大切になってくる。神懸り（他感法）は神界の御眷属が神主の「体」を使用するから、鎮魂以上に体が重要となる。本田霊学の帰神術は強いて言えば審神者主導型ということが出来、従って神主は自然に任せ審神者に任せて「無」の境地を保つように努力し、あれこれ考えぬほうが修行の早道である。

この他感法での修した後の疲労感というものはこれまた大変なものであり、他感法独特の疲れと言ったらよいだろうか。これまた実際に体験した者でなければ如何に言葉を尽くして話しても到底分からないことである。それ程に終わったあとは芯から疲労困ぱいしてしまう。まことの神霊と出会うということは例えて言えば核融合させるようなものであり、太陽を創るが如くともないエネルギーが要る大変なことなのである。これと似て非なるものに核分裂があり、そこそこエネルギーをつくるが、すぐ害



審神者・神主二員構成による他感法

毒を撒き散らす。例えば世間で言う霊能者の如きものであり、一見すごく利益を生み出すようにあるが、これには決して近付いてはならないものである。エネルギーが出る点では良く似ているが、本質的にはまったく異なるのであり、それを明確に区分し、見極める力が必要となってくる。それが審神者である。他感法（帰神術）においては審神者の魂と神主の魂とは空中（神界）で向き合っているわけで（いわゆる霊対霊なので）、上達してくれば「無声の声」というか霊対霊の交流によって意思の疎通が行われるため、強いて言えば帰神術には体は要らないという事になる。ただ修行者が初期の内は神霊が言葉が発せられるのに神主の体を使用するだけなのであるから。（注40）

六、「本当の自分と出会う」ということの意味

本田親徳翁が遺した鎮魂法は、鎮魂修法者が自分の魂（内なる他者）、実は「大いなる外」を鎮魂石に鎮まる神霊に預ける（鎮魂の基本）ということであり、これが成就すれば遂には霊肉分離して自己の魂が神界出入自在の境地に至る。「自己の内なる他者」が「大いなる外なる私」としてハッキリと感得されるに到り、自己の霊魂の運動活動が自在になり、お許しある時は時間・空間を超絶した幽冥界の真実を探索する端緒ともなる。いつてみれば、鎮魂は「真実の自分に出会う」ということでもあるのだ。ここで、『日本書紀』巻第一、神代上（一書第六）の大己貴神の「国作り」の条を見ることにしよう。

自後、国の中に未だ成らざる所をば、大己貴神、獨能く巡り造る。遂に出雲国に到りて、乃ち興言して曰はく、「夫れ葦原中国は、本より荒芒びたり。磐石草木に至及るまでに、威に能く強暴る。然れども吾已に摧き伏せて、和順はずといふこと莫し」とのたまふ。遂に困りて言はく、「今此の国を理むるは、唯し吾一身のみなり。其れ吾と共に天下を理むべき者、蓋し有りや」とのたまふ。

時に、神しき光海に照して、忽然に浮び来る者有り。曰はく、「如し吾在らずは、汝何ぞ能く此の国を平けましや。吾が在るに由りての故に、汝其の大きに造る績を建つこと得たり」といふ。是の時に、大己

貴神問ひて曰はく、「然らば汝は是誰ぞ」とのたまふ。對へて曰はく、「吾れは是汝が幸魂奇魂なり」といふ。大己貴神の曰はく、「唯然なり。廻ち知りぬ、汝は是吾が幸魂奇魂なり。今何処にか住まむと欲ふ」とのたまふ。對へて曰はく、「吾は日本国の三諸山に住まむと欲ふ」といふ。故、即ち宮を彼所に営りて、就きて居しまさしむ。此れ、大三輪の神なり。（注41）

即ち、葦原中国に荒ぶる者たちを和順させた後、大己貴神は出雲の国に到りて言興され、

「これから誰か自分と協力して一緒にこの天下を治めてくれる神はいないものか」

と憂い給うた。その時に、はからずも海面を照らしながら忽然として寄り来る「光り輝く存在」に出会うのである。その光り輝く存在は、

「もしも私が居なかったなら、あなたはこの国を平定することは叶わなかったのだ。私が居たからこそ、あなたは今こうして功績を立てる事が出来たのではないか」

と言った。そこで大己貴神が、

「あなたは一体誰なのか？」

と問うと、

「私はあなたの幸魂奇魂である」

と答えた。つまり、その光り輝く存在は「私はあなただ！」と言った訳である。大己貴神は直ちにそれが自分の幸魂奇魂であることを覚り、自分のたましひ（幸魂奇魂）に向つて、

「ではあなたは何処に住もうと思うか？」

と問うと、そのたましひは、

「私は三諸山に住もうと思う」

と答えたので、結局そのようにした…と記されているのである。

『日本書紀』のこの条の記述は、自己（大己貴神）の内なる他者が光り輝く存在として、つまり大いなる外なる私（本当の私）として立ち現れているのである。この記紀の「国作り」の段には「本当の自分」が外に開かれて実在するという、実相の持つ真相が実に明快に示されており、「私」という本質が実は私自身の中で決して自己完結してはいないのだというこ

とが分るであろう。本田靈学的に言うならば「自己の靈魂の運転活用」が如実に示されている場面であると言えるのである。（注42）

なお、この条では、大己貴神が自分の魂を身体の中府に鎮めたりしてはいないという点に留意すべきである。『古事記』では大己貴神が大国主神と表記されているが、内容においては『日本書紀』とほぼ同旨である。

折口信夫流に解釈するならば、ここで記されている「幸魂奇魂」が明らかに大己貴神のたましひ、即ち大己貴神の「遊離魂」であることは疑いの無いところであろう。では一体、折口信夫はこの大己貴命の国作り神話をどう説明できるだろうか？もし、彼の言う如くであれば、大己貴命は生気なく死体として横たわっていないと話にならない。何故ならば、大己貴命の魂は外にあつて、「お前の魂だ」と主張しているのである。しかし、大己貴命は現に神として光り輝く存在として立ち顕われており、死体として横たわっているなどとは何処にも書いていない。そして、なによりも、魂があるべき場所が大己貴命の身体の中などではなく、つまり神界に坐しているということが明記されている。本当の大己貴命にとっては、実は神界に属している。そして、然るべき秩序にこの世が保たれた時に平和と繁栄が訪れる——となつてゐる。これが事の本質なのであつて、ここに西欧合理主義的機械論などが入る余地は微塵もない。

「本当の自分と出会う」ということの意味を問うことは、実は人が「何故、修行をするか」の意味を問うことでもある。「本当の自分が開かれて外にある」ということをどうやって知らしめるか？自分はこんな人間だ：と大抵の人が最初から諦めているが、「私が私として完結している」というのは人間すべてが共有している妄想でしかない。「大いなる外」というもの、つまり目に見えない神の存在を受け入れる必要があり、本当の自分



大己貴命が自分の幸魂奇魂と邂逅する場面
(挿絵 宮崎 輔輔)

は無限に大きいのだということを知っておく必要があるのである。精神分析や深層心理学の駄目な点は所詮無意識という形で自分の身体の中に閉じこもっている点である。現代は全く西欧の近代科学合理的主義的世界観にドップリ汚染されてしまっており、自分という本質がこの肉体の中に自己完結して閉ざされていると錯覚している。つまり、個として閉じてしまうということの間違いが全く分かっていないのである。

何故、人が修行することによって自己の靈魂が現象を自由自在に見晴らすことが出来るか？愚かな人は「私の中の魂が抜け出て外に迷う」……と考える。先にも述べたが「亡骸」という言葉にもあるように、抜け殻となつた身体は仮死状態となる……といった素朴な民間信仰があるが、この觀念は浅薄な現象理解の上に成り立っており、全く本質とは無縁のものである。眞の修行者は瞑想して世界の隅々を見渡している時、この身体は光り輝くほど充実しているのであつて、決して仮死状態にはならない。否、もし人類が進化して精神力を測定する装置が開発されたとしたら、多分、その機械は圧倒的な力を受けて瞬時に消滅するほどのものである。なぜならその時、その人の身体は宇宙全体と同じ内容を秘めているからであり、この輝ける身体に存在するのが内なる他者であり、つまり神そのものののだ。そしてそれ故にこそ、その人は宇宙全体に遍満・偏在出来るのである。無限の過去から無限の未来に至るまで、どの時間、どの空間にも同時に無限の場所にわが身（魂）を置くことが出来、自分の掌を見るが如くに全てを知ることが出来るのである。

実はその私こそ「眞の私」なのであり、私の本質なのである。眞の私はかくして「外なる私」という本質を露わにするのである。この話は本質的に語ることが難しく、修行を通して体験体得した者のみが知悉し得る最高の境地なのである。（注42）

七、おわりに

巷では一九七〇年代までは社会主義系の科学主義が支配した時代であったが、一九八〇年頃から知的状況が変わり始め、科学という学問が根底から問われ始めた。流れるにはアンチ社会主義の科学主義と言えるだろう。

近代という思考形式全てへの疑いのまなざしを向けるようになったのである。例えば、中世の暗黒時代などといった、従来の決まり切った見方は正しかったのか、今のほうがよほど暗黒ではないのか……といった、もう一度歴史を見直すべきという視点であり、すでに古代や中世の見直しが始まっているのである。

神道では「神ながら」「神のまにまに」ということばがあるが、「天意に任せる」ということは実は大変な勇気の要ることである。あらゆる術に関わるものは天与のものであつて、決して誰もが出来るといふものでもない。創唱者型宗教の根本的欠陥はヒューマニズムから逃れられない点にあると言える。そこでは素直に真直ぐに神界に向かうのではなく、人間的利害が無限に入り込む余地を開けてしまつてゐる。「人間のご都合」という、非常に矮小化された世界の中に、精神的世界を縮小させてしまつてゐる。この構造がせつかく神霊に向かいながら、世にあまたある他愛ない御利益信仰に墮落する原因となつてゐる。

結果は何ら「魂の救済」に繋がらないのである。魂の救済の本来の意味は、現象界に浮遊している我々の心身ともに存在界へと回帰する事以外にはないのである。

そういった意味で、ヒューマニズムに基づく創唱宗教などといったものは古代ギリシャの精神にもはるかに劣つており、私たちはそれらの宗教に穢される以前の状態で、信仰を戻す必要があるのである。

本論で取り上げた本田親徳翁は『古事記』や『日本書紀』、『古語拾遺』、『延喜式祝詞』など日本の多くの古典類を基として古代に参入し、苦心惨憺の末に途絶えていた神霊に通ずる道を復興した古今唯一の人と言つても過言ではない。そもそも日本最古の文献とされる『古事記』は大宇宙の創造と生命誕生の幽玄な神秘を秘めた貴重な予言書であるが、その上巻に「神は隠り身である」と記されているように、神霊というものは私たちの五官で捉えられない存在である。それ故にそれ（神界）への回帰には厳格な「修行」が必要になってくるし、また、その修行にも乗り越えるべき幾多の厳しい段階があるのである。故に信仰の本質に生きようとする者はいつの世も爪上の土というか、それはごく限られた人だけであり、また厳しい試練に打ち克ち、真に幽冥に通ずる境地に達するものは殆ど皆無と言つ

た方が真相であるといえる。

本田翁の著『難古事記』巻一の初めには、次のように述べてゐる。

(一) 神のため人のためにと吾が思い邪なくも歌う此の歌

此の歌は世の神学者流が幽事を現事とし、神を人とし、或いは幽を現とし現を幽とし、或いは現幽を混同し、或いは神魔を弁別せざる等より種々の異説を成し、各自邪説を唱えるのみならず、終いに儒仏を借り老莊を雇ひ、幽現の真説正に地に落ちんとするの勢いなるにより、天下の耳目を一新せんがために至愚を顧みず三百首を詠ずるなり。是を以て四方の君子詳対あらん事をしも折る。(注43)

神には正神も邪神もあることを知らず、幽事と現事の区別もつかず、神と人との区別すらつけられず、また神霊と直接する道も知らず、靈的知識に疎い当時の国学者たちのただ単に訓義のみの神典解釈に終始することの至らざるを本田翁が厳しく駁撃した書である。本田翁のこの切実な訴えは今日、神仕えする聖職者や神典研究者たちにあつても当て嵌まるものであり、己が過ぎ越し方を深く顧み、よくよく戒心すべきではなからうか。

西洋近代科学合理主義にスツカリ浸り切つた、現代のいわゆる悪しき西欧主義の申し子たちには、かんがへ惟神と言つてもそんな者たちでは『古事記』や神道の真髄は到底理解出来ないし、また「日本」は決して分らない。彼らは個人が実体として閉じてゐる（個人実体論）という固定的な觀念から一歩も抜け出していないところが大問題であり、これでは永遠に真実というものとは分らないのである。

結論を述べよう。

ヒューマニズム、理性主義、民主主義……、こういった空疎な言葉に近代社会は人々の幸福と平和とを期待して来た。然るに歴史が如実に物語るように、不安と猜疑と焦燥感の肥大のみが露わになつて来ている。もはや抜本的な世界観の転換が迫られてゐるのである。その時、真に自然に根差した心身のあり方が真摯に問い直されなければならない。今こそ神道の本質を問い直すべき時なのである。それは伝統文化とか日本古来の個別的な風習などといった無責任な価値付けをしているような時ではない。この母なる地球そのものが滅亡の危機に瀕してゐるのである。その根源的な元凶こそは、いわずと知れた人間の我欲に発する御都合主義的なヒューマニズム

以外の何者でもない。この状況に真つ向から対峙できる力を持っているのが本論に述べた真実の神道なのである。人類の平和と繁栄はこの点を描いて他には無い。神道こそが世界に真の平和を齎すものである。

【註】

- (1) 佐伯恵達『廃仏毀釈百年―虐げられつづけた仏たち―』（鉾脈社、二〇〇四年八月）
一三一～一三三頁また、二五二～二九一頁参照。佐伯氏は平田篤胤について「彼は学者ではなく、復古神道という信仰宗教の教祖だった」（五七頁）と手厳しく批判し、また明治政府が行った「神仏判然令は、寺院内にあった仏社を無理押しと暴力によって破棄して、新たに神社を作るための令であり、寺院破壊ののろしであった」（一三七頁）という。
- (2) 小川原正道『大教院の研究―明治初期宗教行政の展開と挫折』（慶應義塾大学出版会、二〇〇四年八月）参照。
- (3) 戸松慶議『天皇論―日本固有の道』（明治維新と神道）（綜合文化協会、昭和五三年一月）二六一～二八三頁を参照。
- (4) 葦津珍彦『神国の民の心』『古神道と近世国学神道』（島津書房、昭和六一年一月）二七～二八頁。
- (5) 『プロテスタンティズムと資本主義の精神』上・下マックス・ウェーバー（梶山力・大塚久雄訳、岩波書店、一九七六年八月）。『プロテスタンティズムと資本主義の精神』（大塚久雄訳、岩波書店、一九八八年四月）参照。
- (6) 葦津珍彦『神国の民の心』『古神道と近世国学神道』（島津書房、昭和六一年一月）二九～三〇頁。
- (7) 葦津珍彦『同右書』三〇～三一頁。
- (8) 堀米庸三『正統と異端―ヨーロッパ精神の底流』（中公新書五七、昭和三九年二月）参照。
- (9) 堀米庸三『同右書』四〇～四一頁。
- (10) 拙著『古代の鎮魂祭』（『鎮魂祭の研究』名著出版、平成六年十一月）一三八頁。

(11) 岩崎武雄『カント「純粹理性批判」の研究』（勁草書房、一九七五年二月）他

原 佑訳『純粹理性批判』上（カント全集、第四卷、理想社、昭和六三年六月）

原 佑訳『純粹理性批判』下（カント全集、第六卷、理想社、昭和六二年七月）

深作守文訳『実践理性批判』（カント全集、第七卷、理想社、昭和九年一月）参照。

(12)

エマニエル・スエーデンボルグ（一六八八～一七七二）ストックホルムに聖職者の次男として生まれた。ウプサラ大学卒業。一八世紀、北欧スエーデンの神学者で、科学者、また鉱山技師。彼は物理的な研究では「靈魂」を見つける事は出来ないことを覚る。靈界見聞者として著名。著書には『生物界の構造』・『靈界日記』・『天界の秘儀』・『真のキリスト教』など多数。カントは健全な理性主義に立つて、数多くの靈界不思議譚や心靈現象などといったものには決して心を動かされることはなかったが、スエーデンボルグには大変な興味を示しており、知人や友人に彼の調査を依頼したり、また自らスエーデンボルグに問い合わせたりしている。だが、カントは「人間の靈がいかんにしてこの世から出て行くか」「靈がどのようにして入ってくるか」「どのようにして靈が此の世に現在しているか」などについては自ら無智であることを表明しておりながら、スエーデンボルグのごとき視靈者の夢などは「理性の一滴をも含まざるもの」として排しており、スエーデンボルグの『神秘的な天体』（全八巻）を「あらゆる夢想家中の最も悪しき夢想家の粗野な幻想」と決め付けた。カントは結局、スエーデンボルグの靈界物語に内在的に共感的理解を示すことは決してなかったのである。このカントの『視靈者の夢』（二七六六年）に対して、彼の思想の曖昧性（二義性）あるいは「理性の不安」があらわれている…と述べ、且つスエーデンボルグの業績に対して「私たちはこれを、単なる迷妄として斥けることができるであろうか」、また鈴木大拙師のスエーデンボルグに対する頌辞との間には「何と雲泥の差が存することであろう」と主張したのは武

藤一雄氏である。

武藤一雄『神学的・宗教哲学的論集』Ⅱ「カントの宗教論について」(創文社、昭和六一年四月)二五〇～二五二頁。

『同書』「キリスト教における死生観」Ⅲ、一二二～一二七頁を参照。

また、坂部恵『理性の不安―カント哲学の生成と構造』(勁草書房、二〇〇一年五月)七五～一三五頁を参照されたい。

(13) 葦津珍彦『前掲書』三三三～三四頁。

(14) 本田翁の略歴については拙著『古神道の秘儀』(第四章、現代の鎮魂、海鳥社、平成五年三月)一三七～一四一頁を参照されたい。

(15) 『古事記 祝詞』(日本古典文学大系、倉野憲司・武田祐吉校注、岩波書店、一九七九年三月)一七九～一八一頁。

(16) 『古事記 祝詞』(日本古典文学大系、倉野憲司・武田祐吉校注、岩波書店、一九七九年三月)八三頁。

(17) 『日本書紀』上、巻第五(日本古典文学大系、坂本太郎・井上光貞ほか校注、岩波書店、一九八四年一月)二三八～二四一頁。

(18) 『同右書』二七〇頁。

(19) 『同右書』二七〇頁。

(20) 『同右書』三二六～三二七頁。

(21) 『同右書』三三〇～三三二頁。

(22) 『同右書』三四二～三四四頁。

(23) 『同右書』三五四頁。

(24) 『同右書』四二六頁。

(25) 『同右書』五二四頁。

(26) 長沢雄楠『惟神』(昭和元年、大本教事件に関して大審院の委嘱を受けて鑑定書を起草し、昭和二年に提出したが、其の一部を長沢門下生の研修のためにタイプ刷りしたもの。月見里神社)二十五頁。

(27) 本田親徳『難古事記』巻六(『本田親徳全集』、鈴木重道編、山雅房、昭和五十一年六月)二二四頁。

(28) 長沢雄楠『神社人異色鑑』(『創立四十周年記念叢書』第三編)一九〇～一九一頁。

(29) 長沢雄楠『惟神』(昭和元年、大本教事件に関して大審院の委嘱を受

けて鑑定書を起草し、昭和二年に提出したが、其の一部を長沢門下生の研修のためにタイプ刷りしたもの。月見里神社)二十五頁。

(30) 拙著『古神道の秘儀』『現代の鎮魂』(海鳥社、一九九三年三月)一四〇～一四一頁参照。

(31) 本田親徳『神傳秘書』(秘書)神傳秘書(巻物)は本田親徳翁が其の門人に印可の印として伝承した皇法と靈学(鎮魂法・帰神術)の奥義である。筆者は静岡県藤枝の「佐藤隆」(卿彦)氏に就いて七年間に亘って本田靈学(皇法・靈学)の指導を受けた。筆者は佐藤師より昭和五年二月に「神傳秘書」の書写を命ぜられ、これを所持している。師の佐藤隆(卿彦)氏は最初は白髯神社の稲葉大津氏に師事し、そこで本田靈学の大凡を修得した後、更に稲葉氏の師匠である月見里神社の長澤雄楠翁にも指導を受けた。筆者が所持する「神傳秘書」は佐藤師がこの長澤雄楠翁から受けたところの印可である。

(32) 本田親徳『同右書』参照。

(33) 本田親徳『同右書』参照。

(34) 本田親徳『本田親徳全集』(鈴木重道編、山雅房、昭和五十一年六月)三七一～三七二頁。

拙著『神道と日本文化』神道行法としての「鎮魂の法」(現代図書、二〇〇六年四月)一九五～一九六頁参照。

(35) 今野健一『死後の世界をつきとめた量子力学』(一九九六年六月、徳間書店)

佐藤文隆『物理学の世紀―アインシュタインの夢は報われるか(集英社新書、二〇〇〇年二月)参照。

池内了『物理学と神』(集英社新書、二〇〇四年六月)参照。

佐藤卿彦『古法式鎮魂法・帰神術の神法』(高窪良誠編輯、顕神本会、昭和三十九年五月)三四～三六頁。

稲葉大津翁は名を大三といい、明治七年十月二十日に静岡県清水市港町に生まれた。明治二十三年六月に東京郵便電信学校を卒業し、郵便電信書記として活躍した後、大正二年六月に関東都督府を依願退職して長沢雄楠翁の門下となり、大正五年には神職を拝命し、清

水市入江町の武内宿禰命を御主神として祀る白髭神社の社司となる。
靈術に関して優れた能力を発揮した。

(37) 佐藤卿彦『同右書』三五頁。

(38) 佐藤卿彦『同右書』三五～三六頁。

(39) 佐藤卿彦『同右書』三六頁。

(40) 拙著『古神道の秘儀』（海鳥社、一九九三年三月）、また拙著『神道と日本文化』神道行法としての「鎮魂の法」（現代図書、二〇〇六年四月）、あるいは拙著『日本神道の秘儀——日本精神文化の根底にあるもの』（名著出版、二〇〇三年一月）などを参照されたい。

(41) 『日本書紀』上、巻第八、一二九～一三〇頁。

(42) 拙著『神道と日本文化』「死者からのまなざしと鎮魂」（「本当の自分」との出会い、現代図書、二〇〇六年四月）三八～四五頁。また、拙著『日本神道の秘儀』（名著出版、二〇〇三年一月）一九～四二頁を参照されたい。

(43) 本田親徳『難古事記』巻六（『本田親徳全集』、鈴木重道編、山雅房、昭和五十一年六月）九五頁。

○本論を書き上げた平成二〇年一月元旦の朝、「神功」という墨字と共に「神事既に畢て、神言ここに窮る」という意味深長なる御神教（神感法による）を賜り、筆者自身が神界より賜った或る一つの役目（御神業・使命）を一段階達成して人生の節目を迎えたことを覚った。いつもながらの短期間でのやつつけ仕事であったが、今回の論文脱稿に関しては何かしら格別の思いに駆られる。佐藤卿彦師から生前「あなたにはこの鎮魂法・帰神術についてこうであるとはっきり主張してもらいたい！」と繰り返し仰っておられたが、その師より託された大事の一端を今果し得た：という安堵からであろう。また、九州大学大学院（宗教学・宗教社会学）修士・博士課程在学中から何かと貴重なアドバイスを戴いた笠井正弘先輩にこの紙面をお借りして感謝申し上げる。